

獣医アトピー・アレルギー・免疫学会主催（開催日時：2014年8月23日(土)、24日(日)）

第1回サマースクール 講演要旨

●要旨\_久山昌之

テーマ：開業獣医師とは

今回、私に与えられたテーマは、「開業獣医師とは」というものであった。小動物臨床に携わることから、今回は小動物の開業獣医師の業務の形態やその開業、経営、苦労などをまず簡単にお話した。本来であれば、動物の飼育頭数や動物病院の開業件数などを統計的に示すのも1つかと思っただが、これは自分でも調べられることであり、また時間も限られているため、むしろ普段から耳にすることの少ないであろう臨床獣医師の経験や想いを伝えることとした。以下、その他の内容を簡単に列記する。

○獣医師および看護師、特に女性の離職率が高いこと。自身で獣医師としての本分を理解することと周囲に理解していただくことの大切さ。

○獣医師に必要な資質：人間力、コミュニケーション力、日常での多種多様な経験、  
プロ意識

○獣医師たるとは：医業とサービス業の両立、獣医師としての矜持と自覚、社会貢献、  
技術と知識、心を磨く

○獣医師として：自分の哲学と信念を貫く、自分の芯を作る

○動物を診ることは、動物だけでなく飼い主さんも診ること、信頼関係の構築が必要

○インフォームドコンセントは、情報の垂れ流しや決断の放棄、責任転嫁の手段ではない。  
体調や病状、方針、予後を伝えることではなく、理解していただくことが大切

○診療は、動物と飼い主に負担の少ないことが優先される

○問診は、病気や体調を知るだけでなく、動物と飼い主さんを知る手段であり、問診中に類床鑑別と診療方針の組み立ても行う。また、飼い主さんの言葉や態度からいろいろなことを感じ取る機会でもある。

○初診時に必ず伝えるべきこと、診療時に気を付けていること

●要旨\_増田健一

テーマ：研究者とは

獣医学研究における研究者の現状を自身の経歴を振り返り、その都度エピソードを紹介しながら獣医学研究の難しさについて説明した。

- 研究費がない。
- 研究設備がない。
- 他の分野の研究者から対等に扱ってもらえない。

また、獣医学ならではの視点もあり、それを活用した発明、発見、そして特許につなげる方法についても解説した。

最終的には、研究の難しさも発明、発見することも、他人と協力することができなければ、決して克服できないことを説明した。獣医学の研究を行うために必要な資質とは、やはり人間性である。

●要旨・水野拓也（山口大学共同獣医学部分子診断治療学研究室）

テーマ：獣医大学の教員とは

第1回サマースクールに講師として声をかけて頂き参加して参りました。私に与えられたテーマは、「獣医大学の教員とは」ということでしたので、僭越ながらお話をさせて頂いた内容について簡単に記します。

私は大学教員になりたくてこの道を目指したわけではなく、いわゆる犬猫のお医者さんになることを目指して大学に入学しました。ところが、臨床をしているうちに治療困難な多くの動物に遭遇し、さらに臨床獣医学のレベルというものは医学と比較してかなり劣っているものであることに気付きました。そして基礎研究を行なうことで獣医学や医学に貢献しようと考えようになり、博士号取得後博士研究員として約4年半マウス免疫の基礎研究に携わりました。その期間は充実したものではありませんでしたが、日々おこなっている基礎研究が獣医師の免許をもった自分にしかできないことなのだろうか、という疑問を感じるようになり、自分にしかできないことは何だろう、自分のアイデンティティとは何か、ということが頭を擡げるようになり、そうして自分の人生を考えたときに、小さい頃からの目標であった臨床獣医師になること、臨床獣医に携わったときに感じた獣医学のレベルをアップさせたいと思ったこと、そして多くの治らない症例を治せるような臨床により近い研究をすること、自分と一緒にこうしたことを追いかけていける次世代の獣医師の教育に関わること、こうした全てを叶えるのは、大学教員の道であると気づき、獣医系の大学教員になりました。

大学教員の仕事は大きく分けて、講義、研究、（臨床）、管理運営、社会活動に分けられます。我々はこれら全てに関与しますので、非常に幅広い形で学生および大学のマネジメントにあたり、学問をすすめることとなります。いわば小さな会社の社長のようなものですが、社長と大きな違いがあるのは、我々の給料は保証されているということです。従って、誤解を恐れずにいけば仕事っぷりがどんなにテキトーでも、飯が食えなくなることはないわけです。そうした中で自分を律し、自分が関与する学問をすすめたい、という人こそ大学教員になるべきだと考えます。大学教員は決して、社会と離れたところで特権が与えられる職業であってはならないのです。

大学教員自体は非常に魅力ある職業ですが、上に記しましたように大きな危険性をはらんだ職業でもあります。たとえば、どのような講義をしたとしても学生から大きな声で批判をうけることはあまりありません（一部授業評価というシステムはありますが）。学生は新しく毎年入ってくるので、教員は毎年同じ話をしても学生たちは気づかない、という環境でもあります。さらに研究はやってなくても、ほとんどの獣医系大学で職を失うことはありません。従って、我々大学教員が自分を省みることができるのは、学会や外部との交流のために外へ出かけて行き、自分の立ち位置を常に確認するとともに、自分がきちんと生きているか、ということをも自分自身で意識をもって確認していく必要があります。

また、大学で一番重要な学生への教育ということで考えますと、我々が最も力を入れなければいけないのは、「研究」であるという考えに行きつきます。教育が大事といいながら、研究に力を入れ

る、というのは一見矛盾するようにも思えますが、高校までと大学で学生たちが受ける教育（講義）の違いを考えますと、我々大学教員は、伝書鳩のように教科書に書いてあることを学生に伝えることが使命ではありません。学生たちに魅力ある講義をするためには、大学教員は研究することによって、自分で何かをみつけ、自身の学問を発展させ、そこで得た経験、知見を学生に与えることが最も重要であり、各教員からしか得られない人間観、生き様を学生が味わうことが可能となるわけです。それこそが大学における真の教育になり、大学が「知識を与える」だけではなく「幅広く深い教養および総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する（文部科学省大学設置基準）」ことができるのではないのでしょうか。こうした思いをもつ学生たちがいれば、是非大学教員として獣医学の発展に貢献できるように一緒にがんばっていければ幸いです。